「日々の理科」（第 2271 号）　2020,-9,30

「八ッ場ダムの水陸両用バス（５）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

私が友人家族と乗った「にゃがのはら号」は、14:40 発の第４便だった。四連休だったこともあり、チケットは売り切れ。朝のうちに購入しておいてよかった。

乗降口では、係の人が消毒と検温を行っている。私は平熱が 37℃近くあるので、ドキドキしながら検温を受けたが、幸いパスできた。周囲にはチケットが買えずに乗れなかった人がたくさんいて、写真だけ撮っていた。何か申し訳ないような気がした。

「運転席兼操縦席」は興味深い。大型バスとしての装備と小型船舶としての装備の両方が備わっている。私はバスのハンドルで、船の舵（かじ）も操作するのだと思っていたが、実際には専用の操舵輪（右側の小さなハンドル）もある。他にも、航行灯、左舷・右舷灯、船舶無線など、普通のバスには絶対にない装備、スイッチ類がぎっしり並んでいる。この乗り物の運転・操縦には相当な訓練が必要だろう。

陸上走行時には、普通のアクセル・ブレーキ操作をするが、湖上航行時は船用のエンジンの出力レバーで操作する。これは普通の小型船舶のものと大差ない。私は大型二種免許は持っていないが、この大きさなら私の船舶免許で操縦可能だろう。船舶免許には一種・二種の区別はなく、営業用の船舶でも操縦できる。

座席の下には救命具が装備されている。これは救命胴衣ではなく、学校のプールで使う「ビート板」のようなものだ。出発前に使用法の説明がある。

小さな子どもは、救命胴衣を着用する。ダム湖は岸まで近いが、もとの地形からかなり深い。こうしたものも、水陸両用バスならではの装備と言えるだろう。